

コトワザあらかると



2023年11月1日

日本ことわざ文化学会
7号

干支のことわざ― 兎 ―

時田 昌瑞

<表紙絵の解説>

兎ことわざの絵は種類としては5種ほどだが、総数となると計り知れない。というのも文様として超人気の高い波兎文を「兎波を走る」のことわざと同じものと考えればの話だが…。

1. 水筒（兎波を走る）。江戸時代のもので高さ 10.4、幅 20 cm。漆塗りに蒔絵がほどこされている。形もユニークで緩やかに弧を描いている。注ぎ口がついていることから水筒とわかる。江戸時代の水筒は非常に珍しいものと思われる。
2. 凧（兎波を走る）。戦後の比較的新しいもの。縦 49.8、横 34.8 cm。このことわざには、焼き物・金工品・染織物など種々の作品や製品がみられる。ことわざとしての意味は月影が水面に映るさまの譬えであり、船足などが速いことの譬え。さらに軍旗や刀の鏢の模様になっていることから強い闘争心を表すものでもあった。現代の波兎は可愛さから人気があるものの、古い時代の兎はたくましく強い存在なのであった。
3. 掛け軸（二兎追う者は一兎をも得ず）。近代マンガの父といわれる北沢楽天による。政治風刺漫画が知られるものの、日本画も多く描いている。この絵は高さ 120.2、幅 33.8 cm。同じテーマの絵が他にいくつかあるのでお気に入りであったのかもしれない。
4. 新案系いろはカルタ（二兎追う者は一兎をも得ず）。「犬も歩けば棒に当たる」で有名な江戸系、京大阪の上方系とは異なる別系統の一種で、新案系と名付けている。作成時期は戦前昭和期。当時のカルタの形としては横長のすごく珍しいもの。このことわざのカルタは明治期から戦前までに5点ある。
5. 上方系いろはカルタ（兎の耳より人の耳）。明治時代の上方系の一種だけにあるすごく珍しいことわざ。意味は不詳ながら、長い耳の兎より人の短い耳のほうが優れているとか、聞くことが大事だとの意と推測する。種類が豊富な上方系の中でも珍しいもの。

<兎に関することわざ>

日本には60程のことわざがある。そのうち現代に使われているものとなると10項目に過ぎないので、時代は度外視して面白く興味深そうなものを取りあげる。

- 二兎追う者は一兎をも得ず：兎ことわざでは断トツの第一位。明治期に11例。戦後は84例あり、戦後用例ランキングでは61位に位置する。元々は古代ローマに由来する大変古いもので、日本では明治初期から知られ、修身の教科書『修身児訓』には挿絵もあった。
- 兎を見て鷹を放つ：手遅れとあきらめずに対応すること。また、事態を見極めてから対処すること。これが「兎を見て犬を呼ぶ」になると手遅れの意となるのだからややこしい。でも、言われてみれば確かに鷹の方が遠見は利く。どちらも江戸期にみられた。
- 狡兎死して良狗烹らる：敵が亡べば軍功をなした者は不要になり排斥されること。中国の古典に由来し、日本でも室町時代（『蕉窓夜話』）から用いられた。異なる言い回しがいくつかあり、森鷗外は「兎尽きて狗烹らる」（『標新領異録』）と記している。
- 飢えたる虎の兎にあえる：腹を空かした虎が格好の餌にありつく。腹が減っていれば何でも食うものだが、それが大好物のご馳走であればこの上ない幸せだ。ことわざ辞典にない言い回しで滝沢馬琴の長大小説『南総里見八犬伝』第九輯卷三七にみられる珍しいもの。

コトワザあらかると7号

目 次

干支のことわざ一 兎 — <表紙絵の解説>	(02)
目 次	(03)
第1部 ことわざエッセイ	
第1章 蟹は甲に似せて穴を掘る 45 都府県庁めぐり印象記。歩き旅。	蟻川 剛 (07)
第2章 「百聞は一見に如かず」… ロンドンマラソンとチャリティーランナー	清水 泰生 (12)
第3章 猫ことわざ 移ろい、あれこれ	時田 昌瑞 (15)
第4章 若木の下で笠を脱げ	渡辺 慎介 (21)
第2部 ことわざコラム	
第1章 ゆるされる‘嘘’とは?— 嘘も方便	小森 英明 (29)
第2章 中国の歴史小説とことわざ	三木 恒治 (31)
第3章 膏肓に入る病 — ことわざ病 —	山口 政信 (33)
第4章 野球ことばと新聞記事	横田 詞輝 (34)
執筆者紹介	(37)

第1部 ことわざエッセイ

第1章 蟹は甲に似せて穴を掘る 45 都府県庁めぐり印象記。歩き旅。

蟻川 剛

1. はじめに

わが家の最寄り駅を出発した徒歩による旅が、だんだん遠くに行くようになると、このまま日本全国を歩いて巡ろうという目標を持つようになりました。では、日本全国となると、どのように、どこを歩けばいいのかを考えました。(北海道と沖縄県は歩いて渡れないので、はじめから除外) 日本地図を見ると各都府県に赤い丸の都府県庁所在地が目につきました。(以降、随時都、府、県、市を省略) 各所在地へ行けばいいと思いましたが、それではなんだかあいまいなので、各庁舎をこの目で見てくるように巡ると決めました。こうして、全国の45の庁舎を巡るという旅の目標が立ちました。

2. 移転グループ

庁舎について、強く興味を持つ出来事がありました。それは、茨城の水戸へ行った時のことです。弘道館の見学を終えて外へ出てくると、初対面の男性に声を掛けられました。その方が言うには、すぐ近くに案内したい所があるということです。おだやかで親切そうな様子を見て、後をついて行きました。案内されたのは、弘道館と続いている敷地の中に背中合わせになっているような所で、空堀を過ぎるとその建物がありました。弘道館と同じ城内に建てられたコンクリートの建物は旧県庁舎で、手狭になったので県庁は新庁舎に移っていったのです。案内の方は、歴史的な建物を見て欲しかったようで、すぐにその場で去って行きました。私は、すぐに新庁舎の場所を地図で調べて、そちらに向かうことにしました。それは、水戸駅の反対側にあり、小一時間歩かねばなりませんでした。そこには真新しい高層ビルの庁舎が立っていました。

同じような経験が、岐阜でありました。県庁をめざして、岐阜から JR に沿って西へ進みました。そして、次の西岐阜という新しく造られたような駅に着きました。近くに新しい高層ビルの県庁舎が立っています。長良川の近くのこの場所に新しい県庁舎が建てられて、その為に新しい駅も造られたのは明らかです。また、石川でもこんなことがありました。少し前の地図では、金沢城の足下、21世紀美術館の近くにあるはずでしたが、新しい地図では、金沢駅から海の方へまっすぐのびる広い道路の途中にありました。ようやく県庁に到着した時には、冬の夕暮れ時で高層ビルの窓々に明かりがついていてそれを見上げました。

このように、庁舎が都市の中心部から移動して、新しい大きな庁舎が建てられているという例が、他にもいくつもあることに出会いました。山形では、城に近い所にある文化財的な建物が県庁舎であることは知っていました。しかし、近年そこからずっと東の方に高いビルが建てられて移動しました。旧庁舎は、文翔館という郷土館になりました。熊本では、熊本城や熊本駅のある中心部からかなり離れて、水前寺公園の近くに新庁舎が立っています。

鹿児島も城山や鶴丸城、新幹線のやってきた JR 駅や中心の繁華街から遠く、路面電車の駅から離れた海の近くの開かれた場所に新しい庁舎が立っています。他と同じように中心部から移

転したのですが、海に近づいたことから目の前に桜島の絶景を見ることができますから、働く人達は、桜島の姿を毎日眺めて意気が揚がることでしょうし、訪れる県民も展望を楽しむことができ、移転は大いに成功です。

灯台下暗し。わが東京も、この庁舎移転グループの典型といえます。江戸城のお膝元の千代田区から淀橋浄水場跡地に開発された新宿区の土地へ、山手線を半周した場所に移転して、そこに新庁舎のツインタワーが聳えています。旧庁舎とツーショットのようによく映り込んで、シンボルのような狩り姿の太田道灌像がありました。この像は千代田区に残されたままになりました。自ら江戸城を築いた太田道灌にとっては、その地を離れて新宿まで行く義理などありません。

3. 城、城下町以外

さて、都府県の成立は、明治維新の廃藩置県によります。従って、各都府県庁が藩の政治の中核だった城やその近くに存在しているものが最も多くなります。そこで、まず先に城や城下町とは関係の薄い所から見ていくことにします。

港町といえば、横浜、神戸、長崎があげられます。横浜は、港に近く、入港して乗る船からも目にすることができ、キングの塔として親しまれた堂々とした風格のある庁舎が今でも健在です。神戸は、港の近くではありませんが、坂の町と言われるように、庁舎の脇を坂道が通り、その斜めになっている道路に庁舎の側面を見せています。長崎は、JRの終点の長崎駅より更に進んだ所に庁舎がありました。出島跡に通じる橋の付近にありました。外国との交流に重要な役割を持った役所があったのでしょうか。質素な建物でしたが、私が訪れた後、平成30年に新庁舎が長崎駅のすぐ近くにできて移転しました。私は、まだ見ていませんが、その位置からすると県庁所在地の主要駅から最も近いものとなります。もう一つ港町といえば新潟です。幕末にかけて栄えて開港場選ばれました。高田や長岡などの有力な城下町より、県の中心となりました。庁舎は、信濃川の河口近く、新潟駅からもさほど遠くない所にあります。

門前町といえば、長野です。古くからの歴史がある善光寺の参道は、時代を積み重ねて町の骨格を成していました。県庁は、その参道からは遠慮して、少し西の裾花川の方へとずれて庁舎が立っています。寺社の多い奈良は、東大寺や興福寺に近い奈良公園に庁舎があります。庁舎が建てられた当時、古都にふさわしい景観か論争になりました。私が修学旅行へ行く頃だったので、半世紀以上前のことでもうすっかり見慣れた奈良の風景となっています。同じく古都の京都は、ずっと町を上り、二条城よりも更に上って、御所と肩を並べるような位置に庁舎があります。周囲に静けさを感じる中に重厚な建物が立っていました。

埼玉は、さいたまですが、合併後で市域が広がってわかりにくくなりましたが、庁舎は浦和区(旧浦和市)にあります。浦和は、中山道の宿場町です。現在繁華街となっている JR 浦和駅から、ゆっくりとした上り坂を歩き続けて行くと、庁舎があり、西側が中山道に面しています。滋賀の大津も、街道や水運の要地です。この庁舎も重々しく歴史を感じさせる建物でした。ただ、最寄り駅の JR 大津駅は、県庁所在地の駅として貧弱さを感じました。京都から歩き旅で半日程の近さで、新幹線がスルーしてしまったという悲哀を感じます。また、千葉と宮崎も訪れましたが、城や城下町との関係は、よくわかりませんでした。

城や城下町との関係で特別な例として、福島と青森を考えました。どちらも会津若松と弘前と

いう長い歴史とすばらしい文化を持った城下町から離れています。福島は、明治政府の意図で、より小さな城のあった福島に移され、庁舎はその城跡にあります。しかし、福島は山形方面への鉄道（のちに新幹線）の分岐点として発展しました。北側にある優美な信夫山の先の桑折には、羽越街道へ別れる追分があり、交通の要地としての素地がありました。一方青森は、北海道へ渡る連絡船の玄関口の港町として発展してきました。ねぶた祭りといえば青森、ということにもなりました。青森駅近くに、あまり大きくはない庁舎がありますが、その眼前の道路が東からやってきた国道4号線と西からやってきた国道7号線の接続点となっているということで、県庁としての存在感が感じられます。福島と青森は、独自に発展をとげてそれぞれ県内第一の都市になりました。

4. 城、城下町

では、いよいよ城や城下町に深く関わりのある府県庁の話に移ります。石垣、堀、城門などが近くに見えた盛岡や山梨、静岡、大分。近くに櫓がある富山。堀を渡って近づいた佐賀。天守閣を時々見上げながら行った岡山。城の近くの家臣の屋敷があった所だという和歌山は、庁舎の色がうすくオレンジ色に見え、特産品のみかんを思い起こさせました。

秋田は、久保田城にほど近く、城内からの移転グループに入れてもいいぐらいですが、高層ビルではなく、広い敷地にまばらに樹木があり、風通しがよさそうでした。

城にほど近い広島県庁の前に着いた時には、日が暮れていました。まず目に入ったのは大きな壁のような建物でした。視界の夜空の半分を占めるような建物には、縦横に整然と窓の照明が並んでいます。しかし、いくら大きい建物といっても、照明がじっと静かについているだけで、県庁舎のような活気が感じられません。その建物は、地図で調べると県庁に隣接する市民病院でした。被爆地ならではの光景が、印象に残りました。

城下町といっても、雄藩になるととても広大なものになります。大きな城を持ちながら仙台と福岡は、青葉城と福岡城とは離れた所に庁舎が立っています。仙台はJRの仙台駅のほど近く、福岡は東部の博多地区にあります。どちらも県のみならず、東北や九州の地方の中心となっていますが、巨大なものではなく周囲にとけこんでいました。

城から少し距離をおいているのが、栃木と三重です。どちらも宇都宮城と安濃津城とがありますが、どちらも用地の関係でしょうか。少し高台になっている所に立っています。

香川は、海辺に高松城がありますが、商業地を中心とした繁華街は、鉄道を中心に広がっています。そうした町の中を歩いていると、急に建物に挟まれるようにして、県庁の入口がありました。庁舎前の広場ではなく、気軽に入れそうな親しみを感じました。一方、徳島も城から少し離れていますが、にぎやかな徳島駅から離れた川の近くにあり、人通りが少なくてちょっと寂しい所がありました。

城の近くにあるというのと、堀などに面して城に向かって立っているのが、どちらも大都市の大阪と愛知で、名城に相對しています。映画の一場面で、庁舎内の一室から窓の外に大阪城の天守閣が大きく見えるというところがありましたが、大阪と名古屋ともに城を毎日目にして、意気を揚げていることでしょう。しかし、庁舎の形は対照的です。大阪の庁舎は茶色くてがっちりど角ばっていて重々しいのが、名古屋の方は、城を模した屋根や破風をつけた城を意識した外観

になっています。更にすぐ近くに立っている市役所の庁舎の外観が似ていて、兄弟のように見えたのが面白かったです。また、城と向き合うのではなく、背後から見守られているのが島根と高知です。どちらも、現存天守を持つ松江城と高知城の前に庁舎が立っています。近くには、どちらも旧君主の像もありました。

城に寄り添うように立っているのが愛媛の松山です。山城のように高い所にある天守閣から、ずっと視線を下ろしてくると麓のような所に庁舎があります。その前は小さな鉄道も走っている広い道路になっているので、松山城も庁舎もいっしょに見ることができます。庁舎に近づくと、洒落た外観とともに、その窓ガラスがステンドグラスであることに目が魅かれます。きっと内部に入ると光の色の芸術とそれに似合う構造があるのでしょう。鳥取も山城の緑の山の麓に、庁舎があります。鳥取城は、豊臣秀吉の兵糧攻めを受けた山城です。でも、山城といえども麓の平地には、政治に関わる役所があったことでしょう。庁舎の近くには、木造の城門の一部が残されています。

城そのものの場所にあるといえば、群馬の前橋です。新幹線をはじめ、交通の要地として発展を続ける高崎には、人口でも地価でもかなわない前橋ですが、並木道が整っているなど文化的で落ち着いた都市です。高崎から前橋に向かうと、遠くに一つの高いビルが見えてきました。その群を抜いた高さは近くに比べるものがなく、これは県庁だとすぐに見当がつきました。そのビルを目ざして歩いて行くと、大きな利根川にかかる橋のたもとに着きました。対岸には、目当てにしてきたビルが立っていました。そして、視線を下ろしてビルの下の方を見て驚きました。ビルの足元を洗うように、すぐ近くまで利根川の流れが迫っていました。庁舎が前橋城の敷地に建てられたのですから、城の防御としての川がすぐ近くを流れているというのは当然のことでした。川を越える大きな橋を渡って、庁舎の前に出ました。その庁舎というのは、下部の方は旧庁舎の外側を全部残して、中央部に高層ビルを建てたという構造です。旧庁舎が手狭になったからといって移転せず、かといって旧庁舎を建て換えることなく、旧庁舎の外観を残しつつ新庁舎を建てています。このような庁舎は、他には見られません。毎年、元旦の実業団駅伝のゴール地点が庁舎前になっており、この建物が映り込んですっかりおなじみです。そして、この建物の背後には大河利根川が流れているのです。

山口は、どうでしょうか。長州藩の藩主の座す指月城や明治維新の中心人物を輩出した城下町は、日本海側の萩にあります。しかし、幕末になると、京大阪や江戸の情報を一刻も早く得ようと、山陽道により近い山口に政庁を移しました。庁舎は、その地を引き継いでいます。そして、敷地内に明治の偉人達もくぐったという、木造の門が誇らし気に残されています。山口へは、新幹線の新山口（旧小郡）からちょっと寄り道をしなければなりません。

さて、いよいよあと1つだけ残っている県庁があります。どこでしょうか。それは、福井県庁です。歩き旅では、米原から日本海側の北陸地方に向かいました。まず福井県に入るので目標の県庁を地図で捜しました。福井駅の周囲や近くにある福井城の辺りも捜しましたが、なかなか見つかりません。少し範囲を広げて見回しても、県庁らしい建物は見つかりません。おかしいなと思い、もう一度福井城へ目を戻しました。すると、ほぼ正方形を形づくっている堀に囲まれた本丸の部分に、すっぽりと納まるような四角形の建物の印があり、それが県庁でした。城の外の形

に目を奪われて、その中を県庁が占領していたとは、すぐに気づきませんでした。福井城は、現在は本丸の部分しか残っていませんが、柴田勝家時代の北ノ庄の城は、もっと範囲が広く、現在の市街地の中でその頃の石垣の一部が発掘されています。さて、福井駅からあまり厚みのないビル街を抜けて、すぐに堀端に出ることができました。堀と石垣を隔てて庁舎の上部が見えています。そして、堀に架かる橋を渡り、石垣の間を歩いて庁舎の前に出ました。もちろん庁舎の前には、自動車が往来できる十分なスペースがあり、建物全体を見上げることができます。ただ、左右に目をやるとすぐに石垣が目に入り、石垣に囲まれているという立地がわかります。その後、庁舎の周囲はどのようになっているのだろうか、と石垣に沿って右側から回り込みました。もう近くに石垣が見えることに慣れていましたが、歩いて行こうとする先の石垣が何段にも渡ってずれていて、半分崩れかけているような場所が見えて驚きました。どうしたのかと、近づいて案内板を見ました。すると、これは、1948年（昭和23年）の福井大地震による控天守台の被害で、大地震の恐しさを後世に伝えるために保存しているものでした。他に市内には、大地震の記憶を残すための「不死鳥の碑」というものもありました。県庁巡りにやって来たものの思わぬものも目にすることができ、強く印象に残りました。

5. おわりに

日本全国を歩いてまわろうと考えて目標とした都府県庁めぐりですが、東京のわが家を出発した日から13年余り、ようやく最後に残っていた県庁にたどりつきました。45番目の県庁は、宮崎でした。東京からの距離や交通の利便性からすると、妥当なところでしょう。いよいよ最後の庁舎を目にするということで、いささかの感慨をもって近づいて行きました。ところが、目の前にした宮崎県庁の茶色い建物、車寄せと大きな植物を配した正面の姿は、今まで何度も見たことがあるもので、気持ちが和らいでしまいました。それは、元東国原知事時代に宮崎県の広報活動の背景として、何度もテレビの映像で目にしていたからでした。こうして、目標を達成して、歩き旅の第一段階は無事終了しました。

巡り歩いて出会った庁舎は、それぞれ個性を持っていました。その時代の情勢や経緯など様々なことがあって今に至っています。そうした中で、類似点や特徴を見出だすことができたことは、とても楽しいことでした。現今では、ホームページによって、その外観、沿革や地理など即座に目にしたり、正しく調べたりすることができます。また、地元の方ならば、詳しく知り尽くしているかもしれません。ただ、旅の途中で出会い、近づき、周りの風景とともに数々の庁舎を見たことは、懐しくもあり、旅の思い出を豊かにしてくれました。

ちなみに、東京都はじめ最近新しく建てられた庁舎には、最上階に展望施設を設けていることが多いようです。そこで一般の訪問者が、市街地や周辺の風景を眺めることができるようになっています。私も再訪の時には、前もって調べておいて、そのような展望室に上って、その土地の風景を楽しみたいと思っています。

第2章 「百聞は一見に如かず」…ロンドンマラソンとチャリティーランナー

清水 泰生

ロンドンマラソン 2023 の抽選に外れた。海外枠が 500 人ということで外れて当然である。

ロンドンマラソンは、海外のランナーはツアーかチャリティーでの参加しかないとされている。チャリティーランナーの場合、募金 30 万円前後を集めないといけない（交通費、宿泊費を除く）。ツアーは抽選であり、全部で 80 万円かかるだろうと思っていた。実際は、12 月下旬に出た案内によるとホテルが相部屋でなければ全部含めて約 84 万円であった。やはり、思った通りであった。

私は以前からチャリティーランナーの事は聞いてはいたが、実感がなくよく分からなかったので、「百聞は一見にしかず」、実際に身をもって経験したいと思った。

ベルリンマラソンで知り合ったチャリティーランナーとしてロンドンマラソンを走った人にロンドンマラソンのチャリティーランナーの様子をきいた。その人の話によると、誰でもチャリティーランナーとして走ることができるわけではなく、申込書の書類選考、電話面接が厳しく、申込書に情熱的な志望動機を書くことが大切であると言っていた。その人は 10 団体に応募したようである。それで話が来たのは一団体のようだった。うーん、厳しいなと思った。その時、応募をやめようかと思った。しかし、私は、子どもがいないので、このマラソンで次の世代を担う人に何かを残したいと思い踏みとどまった。

子供に関するチャリティー団体をロンドンマラソン HP で探し、「足の不自由な子どもに車いすを与え社会自立を促す」団体 (Whizz-Kidz) と「子どものガンの研究基金」の団体等 3 団体に 11 月 15 日ごろ申し込んだ。ロンドンマラソン HP のチャリティーランナーのコーナーでチャリティーの団体を探し、そこから申し込んだ。

氏名、住所、国籍、生年月日以外に募金の計画、志望動機を詳細に書かなければならなかった。HP で申し込んだ後、「足の不自由な子どもに車いすを与える」団体 (Whizz-Kidz) から詳細な動機をメールできかれ、動機を詳細に書いてメールで返信した。「応募動機がよく分かりました。チャリティーランナーのメンバーとして歓迎いたします」というメールが来た。すぐに登録料約 16,000 円を払い、メンバーとなった。メンバーになったが、Whizz-Kidz のホームページでの私の募金のコーナーがなく困ったが、ロンドンマラソン事務局からマラソン登録のお知らせのメールが来て、登録（参加費はなし、登録料が参加費の代わりなのかもしれない）をしたら、私専用の募金のページ(サイト)が自動的に出来ていた。試しにクレジットカードで寄付（入金）をしようとしたが、カードがはねられた。別のカード会社のカードで入金しようとするとうまく行った。どうも世界的に有名なカード全部が支払えることができるというわけではない。他の人からも同じようなことを言われ、入金の説明に手間取った。それから、ある人から、英語ができないので HP から寄付ができないと言われた (HP は英語)。この人に対しては英語の説明書を作って送ろうと思う。

しばらくしてから私の募金の HP のコーナーで私のストーリー(英語)を書いた。ストーリーはチャリティーランナーをするきっかけ、何を目的、目標とするのかを明確に述べるものであり、寄付が集まるかどうかの大切なカギであると言われている。「私は子供がいないので将来を担う子

ども、特に可能性があるのに障がいがあるため臆病になっている子供に車いすを与え、そして、夢と可能性を与えたい」というストーリー（趣旨）を書いた。

Whizz-Kidz の HP の私の募金のコーナーが完成、募金活動開始。知人、学術会議の参加者、ランニング関係者等に募金をお願いした。ロンドンマラソンの1週間前に24万円ほど集まった。あとの10万円は私が募金をしてノルマを達成した。達成の1週間ほど前にロンドンマラソンの案内が来た。

4月20日早朝、関西国際空港を発ってロンドンについた。翌日の21日の朝ロンドンの空港についてからすぐロンドン大学を訪問、ロンドン大学の日本語の先生と談笑した。そして翌日の22日、ロンドンマラソンのエキスポへ。エキスポの中にあるロンドンマラソンの受付でアスリートビブスをもってチャリティー団体 Whizz-Kidz のブースへ。ブースにあるチャリティーランナーの名前が書いてあるボードに私の名前を見つけ写真をとり、Whizz-Kidz のパンフレットをもって職員と談笑した。ほかのチャリティー団体のブースが多くあったが、各ブースとももう少し団体の慈善活動の紹介があればよいと思った。そして宿舎に戻りチャリティー団体 Whizz-Kidz のランニングシャツにアスリートビブスをつけたりしてマラソンに備えた。

マラソン当日の4月23日、9時30分スタート。いくつかの地点で Whizz-Kidz の T シャツや旗を持った人が応援をしていた。レースは、35キロ以降ガス欠になり、とにかく完走を目指して「石橋をたたく」作戦で37キロ付近から歩いてゴールを目指すことに…。39キロ付近を歩いているときに後ろから来た男性のランナーたちが「頑張れよ」と声をかけ肩をたたいてくれて元気ももらった。あと2キロの地点で元気になり再び走りゴール。ゴールしたときに3か月の募金活動と協力してくれた仲間が目に浮かんできた。「ありがとう」。完走メダル等をもらい、服を着替えて、完走パーティー会場の場所へ歩いて向かった。会場に行く途中、いろいろなチャリティー団体の人が、完走パーティーの場所を書いたボードを持っている光景を見かけた。そして同じチャリティー団体のランナーと一緒に会場へ…。受付でマッサージの券と食事の券をもってマッサージ室へ。マッサージのあと食事をいただいた。職員さん以外、車いすの子供たちがいなくて残念だった。完走パーティー会場は、チャリティーの金を集めてよくやったという雰囲気強いが、チャリティー団体活動やその募金を受けている子供たちと接することができず残念であった。

翌日の24日、国際交流基金ロンドン日本文化センターで国際交流基金の人と談笑。そして夜の便で帰国の途に就いた。この日の午後、研究発表の予定だったが、発表の日にちが変わり帰国後の日本時間25日夕方、オンライン会議となったので国際交流基金の人と話をしてからすぐ空港へ…。出発まで空港で時間をつぶした。

今回初めてチャリティーランナーとして走ったが「百聞は一見にしかず」。実際にやってみて、募金活動の大変さと人の温かさを感じた。これで終わりではなくできる範囲で慈善活動をしたいと思う。

私の所属の団体のブース



第3章 猫ことわざ 移ろい、あれこれ

時田 昌瑞

日本には230程度の猫のことわざがある。だが、個々のことわざについて、その起こりや歴史的な流れなど不詳なものも多く、詳細はあまり追究されていないと見られる。本稿第1部では、古代から現代までの猫に関することわざのうち、実際に使われたものに限定した上で、実態の一端を覗いてみることにした。調査資料は筆者が古代から現代までのことわざ使用例を調査したリストを用いた。古代から江戸期までをE、明治から戦前昭和期までをM、戦後から平成までをSと略号化して進めることにした。それぞれの概数はEが6万例、Mが3.8万例、Sが4.5万例。このリストの一部は『世界ことわざ比較辞典』（岩波書店 2000年）の巻末付録「常用ことわざランキング100」を参照されたいが、『世界ことわざ比較辞典』の時点より現在のリストには江戸期までに5,000、明治期に1.8万、戦後期に5,000が新たに加わっている。リストを3つに分けた理由は、日本のことわざの実態・あり様を時間的な流れから跡付けられないか、との思いがベースにあり、古事記から江戸期まで、欧化路線が導入された明治期以降、既存の価値観がひっくり返った戦後期と区分することでことわざの時間的な流れが見えやすくなるのではないかと考えたからだ。ことわざに明確な時間軸を設けることがことわざの実相に近づけられるのではないかと思いつき実行した次第だ。

ことわざを3区分した考察の試みは、数年前からいくつか試してみた。個人のレベルでは膨大なものは対象にできないので、ことわざ数が100位のものとしているはカルタ等で試したのだが、あえなく失敗。主な原因は現代人にはなじみの薄いことわざが多く、個々のことわざの軌跡がたどり難い点だった。そこで現代人に親しみがもたれ、程よい数の猫のことわざを取り上げることにしたのだ。

[I]主な猫ことわざの移ろいの様相

まず、戦後の用例リストから使用度の高い現代のベスト10のものから始めたい。①猫の手も借りたい(53例) ②猫も杓子も(49例) ③猫の額(42例) ④猫に小判(40例) ⑤窮鼠猫を囓む(38例) ⑥猫の目(33例) ⑦白い猫でも黒い猫でも鼠を捕るのが良い猫(28例) ⑧猫の首に鈴をつける(16例) ⑨猫に鯉節(10例) ⑩猫が見ても視聴率(7例)となる。

*以降の英字後のアラビア数字は使用例数を示す。

これを歴史的な流れに沿って各時期の使用頻度の数値を以て示す。

- ① 猫の手も借りたい(忙しく人手が欲しいことの譬え)：これはE5→M3→S53となり、戦前までは稀にしか用いられておらず、常用となるのは戦後になってからと判明する。ちなみに戦後の使用例数が53という数値は戦後の全ことわざ使用度ランキングとして168位に当たるものなので戦後になって急速に広まった事例といえそうだ。ことわざだけが広まったのではない。便利屋・美容室・書店・菓子店・パン工場などには「猫の手」の名をつけた商店などが全国のあちこちにある。また、商品にもTシャツ・パーカー・巾着袋・ネクタ

イ・タイピン・洗濯ばさみ・ラーメン・マドレーヌ・パンなど幅広く活用されている。ことわざが実用品に用いられたものとしては最大級のものかも知れない。

- ② 猫も杓子も (だれもかれも皆いっしょに) : この数値は E47→M64→S49 となっている。明治以前より以後の方が相対的に使用頻度は増すようだが、江戸時代から現代まで大きな変化はない例とみられる。ただ、ことわざ全体の総数が最も少ない明治期の数が多いのが目を引く。ここのことわざの特色は色々な語源説が存在したことだろう。a) 禰子も釈氏も (神主も僧侶もの意) b) 寝子も釈師も (売笑婦と講釈師の意) c) 女子も赤子も (女・赤子・子供) d) 杓子を主婦と解釈して一家総出の意 e) 猫も狗エの子もが変化したもの等があった。これほど多彩な語源がある例は他に知らない。
- ③ 猫の額 (面積が狭いことの譬え) : 江戸期でもぼつぼつ使われていたものだが、常用となるのは明治期から。具体的な数値で示すと、E9→M28→S42。ただ、明治期から戦前までは常用にあったとはいえ、もっとも頻度が低いレベルであった。だが、戦後からは数の上でも倍増し中頻度にいたっているので、時代を重ねることで人々に徐々に浸透して行ったものと考えられる。
- ④ 猫に小判 : 猫のことわざとして現代最もよく知られているものとみられる。それにも拘わらず、現代での用例数ランキングが4位であるから少々意外に感じる。ことわざには一般に知られる認知度と実際に使われる使用度の関係が相応しない場合がときおり出てくる。ちなみに、このことわざは全時代の総数は98例で猫のことわざ第3位に位置しており、江戸期にも最も使われていた。また、江戸期のいろはカルタの前身のたとえカルタや上方系統のいろはカルタにも取り入れられていたし、現代でも子供向けのことわざカルタに使われているのでそれぞれの時代で多くの人々がごく自然に覚え身につけていたのかも知れない。筆者の憶測になるが、上位の3つのことわざより具体的なイメージを持ちやすいことわざらしさが具わっているかと思われる。こうした点が認知度の高さに結びついていると考えてみたが、どうだろう。
- ⑤ 窮鼠猫を噛む (必死になれば弱者でも強者に打ち勝つ) : 中国の古典に由来する古いことわざで、日本でも鎌倉時代から知られていた。用例も軍紀物『太平記』に二度用いられているように江戸期以前から使われていた。用例の数値を時代順にみると、E37→M25→S38 となっていて、相対的には現代がやや高いものの、どの時代でも同程度に使われたことがわかる。猫がでてくることわざではもっとも長く使い続けられていることわざといえる。ただ、言い回しはいろいろで、見出し形や「窮鼠却って猫をはむ」などが主であるものの、バリエーションが非常に多くある。
- ⑥ 猫の目 : 物事が目まぐるしく変わることの譬えで戦後では33例あり、使用例数ランキング6位のものだ。政策や対策などがしょっちゅう変わり一定しないことに対して批判的なニュアンスで用いられる。野球では打線がくるくる変わるのを猫の目打線という。現代では常用となっているものの、江戸期ではたった2例しかみられない。明治になって8例と少し増えてくる比較的遅く使われるようになったものようだ。補足ながら江戸期には「猫の目玉と男の心変わるが習い」という毛色の変った言い回しもあった。少し説明する

と、猫の目玉に変わりやすいことの譬えの「男心と秋の空」をつなげて面白おかしくした例だ。なお、「猫の目の玉」「猫の目玉の如く」といわれることもあった。

- ⑦ 白い猫でも黒い猫でも鼠を捕るのが良い猫（大事なのは手段ではなく成果をだすこと）：「白猫でも黒猫でも～～」としたものや、白黒の順序を逆にした「黒猫でも白猫でも～～」ともいった。中国共産党指導者の鄧小平が推進した改革開放政策を象徴する言い回しとして有名になった。それもあってか、中国ではこれを図像化したものがホテルの玄関に飾られたり、巨大なアーチ橋のたもとに据えられたりしたもの等があった。もともとは四川省にあった「黄色い猫でも黒い猫でも鼠を捕りさえすればよい猫なのである」との表現に由来するそうだ。日本でも1990年ごろから見られるようになり、戦後の使用例は28例にのぼる。国家の重要政策に関わる非常に珍しいものであり、近代以降に中国から入ってきたことわざでは最も新しいものだろう。
- ⑧ 猫に鈴をつける（実行が難しく危険なことの譬え）：「猫の首に鈴」などとも言う。イソップ物語の「鼠の会議」に由来する古いことわざで日本でも古くは江戸初期の仮名草子『伊曾保物語』にみられる。明治時代以降では通俗教育の書『通俗教育道話』（安芸喜代香 大正12年）でイソップ物語を紹介する箇所でも触れられているものの他にみられない。戦後は劇作家・寺山修司の戯曲『血は立ったまま眠っている』（1960年）あたりが早いようだ。戦後の使用例数は16。
- ⑨ 猫に鯉節（間違いが起こりやすい状況の譬え）：「猫に鯉節の番をさせる」ともいうし、「猫に鯉」ともいう。江戸時代には35例を確認しており、江戸期の猫ことわざ使用例数の第4位になるものだが、これが明治期には13例、戦後にいたっては10例と大幅に減少している。減少の原因は不明ながら、鯉節の現物を目にする機会も稀になった現代人の生活を反映しているかも知れない。なお、このことわざの面白さは、むしろ絵にあるといえる。版權やスペースの関係から割愛するが、拙著『図説ことわざ事典』（東京書籍 2009年）には多くの図版が載っているのをごらんあれ。
- ⑩ 猫が見ても視聴率：人間がみているテレビ画像を猫がいっしょに見ていても一人の視聴者としてカウントされること。苛烈な視聴率競争に明け暮れるテレビ業界を皮肉ることば。「猫が見てても1%は1%」ともいう。後者は女優・高峰秀子の警句といわれる。この言い回しを初めて見たのは1992年11月20日の朝日新聞朝刊でテレビの視聴率を取り上げた記事であった。翌月の12月17日には毎日新聞が社説で用いていた。以降、新聞では2016年10月27日の毎日新聞夕刊まで計8例出てきた。数の上では多いとはいえないものの、20年以上も続いているし、新聞の社説にも登場していることから流行語の域を越えていると判断して新しいことわざと見なしてよいかと考えた。何といても猫がネズミを捕る家畜からペットへと代わり家族の一員であることを示したものと見えよう。

以上、戦後昭和から平成の現代（令和は含まず）までの使用頻度の高い猫のことわざ10件を概観してみた。たった10件ではあるものの、ほんの少し分析してみることにしたい。a) ことわざの起こりの時期や場所に違いがあること。ほとんどは江戸期だが、鎌倉（④窮鼠）、戦後（⑦白猫

黒猫、⑩視聴率)、外国(④窮鼠、⑧首に鈴、⑦白猫黒猫)もある。b) 高い使用度の時期に違いがあること。これを更に3つのパターンに分けると、イ] でっかち形(猫の額、猫の手、首に鈴、猫の目)、ロ] 頭でっかち形(鯉節)、ハ] 寸胴形(杓子、小判、窮鼠)となる。約言すれば、ことわざは昔から現代まで原形のまま平坦に連なるものではなく、生成の時期や発祥地を異にするし、盛衰するような凹凸もあって一様な存在ではないということになるようだ。

【II】猫ことわざトピック

第I部では正確さを第一に事実に忠実な内容のものとしたが、いささか真面目過ぎたとの深い反省のもとに面白可笑しい内容も取り入れていきたい。

◇犬なのか猫なのか、それが問題だ：近松門左衛門『本朝三国志』に「飼ひかふ犬はまだしも、灰猫めに手をくはれたる口惜や、」との一節がある。犬ではなく猫に噛まれたのを悔しがる場面だ。じっさいの処、猫もかむので「飼ひ猫に手をかまれる」ということわざが生まれても不思議ではないのだ。また、江戸期は猫の手も借りたいの代わりに犬の手とした「犬の手を人の手にしたい時分」(浄瑠璃・並木宗輔『撰津国長柄人柱』1727年)との言い回しもあったし、「犬の手も人の手といふ時分」とする例は上田秋成『諸道聴耳世間猿』1766年にあった。ただ、犬の例は後世には伝わらなかった。

◇日本でのもっとも古い猫ことわざは何：「鼠^{ソゾウ}上の猫の如し」(空海『三教指帰』巻中)。「始には鼠^{ソゾウ}上の猫の如し、終には鷹^{トウカ}下の雀たり」と大なる権勢を振るう意のもので、反対の意味に当たる鷹と対の形で用いられている。ことわざ辞典類には見られない大変珍しい語句で後世には伝わっていないようだ。平安時代初期(797年)に空海によって創作された譬えの一つかみている。余談になるが、ことわざになった人物では、義経「義経と向こう脛(語呂は似るも内容は全くの別物)」、弁慶「弁慶に薙刀(強い者がもっと強くなる)」などが知られるものの、「弘法も筆のあやまり」「弘法筆を選ばず」の2つの有名なことわざがある空海もそうした一人になる。

◇日蓮が好んだ？ことわざ：昔の高僧といわれる人物の著述には時折ことわざが散見される。とりわけ鎌倉時代の日蓮にはことわざがけっこう目に入る。「良薬口に苦し」「毛を吹いて疵を求む」「後悔先に立たず」といったよく知られたものから辞典にも無い「瓦の鏡に天の月を浮ぶる(不可能な事)」などが出てくる。といっても猫のことわざとなると話は別。それでも岩波書店の日本古典思想体系に入った2冊『日蓮』(下山抄)『親鸞集 日蓮集』(立正安国論、開目抄に2回)のなかに、「猫の鼠を伺う」との言い回しが何と4回もみられたので驚いた。日本最大級の辞典にもない珍しい言い回しだ。他の猫のことわざは、「鼠の猫を恐るる如し」が見えるだけだから。

◇井原西鶴には？：江戸時代の俳諧師であり浮世草子作家でもある西鶴の作品には600を超すことわざが使われている。ことわざがよく使われた江戸時代にあっても最もことわざを使った一人とみている。この中で猫に関することわざを拾い出すと、○猫に傘見せる(驚かせること『好色五人女』) ○猫に石仏(無駄な事『好色一代女』) ○猫に鯉節(油断ならないこと『名残の友』・『嵐無常物語』) ○猫に干鮭(過ちを犯しやすいことの譬え『好色一代男』) ○猫の一步(未詳『大句数』)と5つでてくる。他に見られない珍しいことわざが少なくない

し、後世に伝わらなかったものも目に付く。

- ◇夏目漱石：『漱石全集』（新書版 27 巻 岩波書店 昭和 31 年～32 年）に見られたことわざの総数は 639。このなかで猫に関することわざは、○猫なで声（優し気なこびる声） ○猫に紙袋（後退すること） ○猫の額 ○猫の前の鼠（危機に直面する） ○猫も杓子もの 5 項目となる。用例数の多いのが杓子で 4 例。次が額の 3 例。全部でも 10 例に過ぎない。○猫の前の鼠のように鎌倉時代に使われた珍しいものもあるものの、他は周知のことわざだ。漱石の数ある作品の中でことわざが最も多く使われたのが『吾輩は猫である』で 111 ある。その中で猫のものは、○猫なで声 ○猫の額 ○猫も杓子もの 3 例だ。意外に少なく拍子抜けするくらいだ。蛇足だが、漱石の小説は時代が若くなるに従いそこに用いられていることわざが減少している。
- ◇だれが最も多く猫ことわざを使ったか？：この問に対しては但し書きがある。というのも浮世絵師の歌川国芳には猫のことわざ絵がたくさんあり、数え方によっては何十にも及ぶからだ。ここでは残念ながら紹介ができないので NHK テキスト『趣味どきっ！ 不思議な猫世界』（NHK 出版 2018 年）を参照されたい。なので、対象は文字作品に限る。ナンバーワンは上方の無頼派作家・織田作之助だ。『織田作之助名作選集』（15 巻 現代社 昭和 31～32 年）には、「猫も杓子も」が 16 例もでてくる。バリエーションと思われる「猫にも杓子にもなれぬ」「猫になり杓子にもなる」という言い回しもある。なかでも『肉声の文学』（昭和 30 年）にはバリエーションを含めて 9 例もある。その上、特筆すべきは「猫と杓子について」とする一章が設けられているのだ。さらにその章で論じられている内容は瞠目に値する。一部を引用すると「みなさんは、日本を敗戦国にしたのは、軍閥と官僚だと思いにいらっしゃるかも知れませんが、実は猫と杓子が日本をこんなことにしてしまったのです。猫と杓子が寄ってたかって、戦争だ、玉砕だ、そうだそうだ、賛成だ賛成だ、非国民だなどと、わいわい言っているうちに、日本は負け、そして亡びかけたのです」。猫も杓子もの否定的側面に光をあて見事に問題点を浮かび上がらせている。

[Ⅲ]珍しい猫ことわざ

現代では使われなくなっている比較的めずらしいものや、辞書にも無い全く知られていないことわざをいくつか取り上げる。

- 猫が肥えれば鯉節がやせる：片方の利益は他方の害となることの譬え。反意語を巧みに織り込んだ作品。視覚的にもイメージしやすくユーモアもただよう楽しいことわざだ。江戸中期の浮世草子『世間学者気質』（第 2）に見出しとして用いられている。
- 猫の尻にさい槌：猫の尻をさい槌でぶつことからいう。さい槌は木の槌。方法が適切ではないこと。また、不釣り合いなことの譬え。江戸期の俳諧書や滑稽本で用いられている。ところで何故このように言うのか。一説では猫を女の陰部（女根）、さい槌を男根として小さな女根に大きな男根があたる不釣り合いをいう。ちなみに猫の陰部は「猫のおまんこ」といい小さなものの譬えとして一部で知られる。
- 学べば猫も虎となり、学ばざれば虎も猫となる：学問を身につければ強力な武器となること。学問の有用性をこれほど高く評価した例は珍しく、かつ希少だ。明治時代のジャーナリスト・

赤羽巖穴『乱雲驚涛』（十七）で用いられている。

- 猫の額のを鼠がうかがう：「額」を「鼻先」に代えた言い回しもある。『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』にみえる。きわめて危険なこととか、不可能なことを意味する。江戸時代にも文学で数点使われていたものの、以降は姿が消えている。同じ意味合いの「猫の食う物を鼠が狙う」「猫がくわえている物を鼠が望む」など類似の言い回しも消えた。
- 鼠の地獄猫の極楽：片方によいのは他方には悪いとの譬え。鼠と猫の両者の位置関係を巧みに使った面白い言い回し。江戸時代の思想家・二宮尊徳『二宮翁夜話』（巻5）には「ちうちうとなげき苦む声聞けば鼠の地獄猫の極楽」とある。これまで全く知られていない大変珍しい言い回しだ。同著には「光陰矢の如し」「盗人を捕えて縄をなう」などの周知のもの他に「民は国の本」「三年の貯蓄なければ国にあらず」といった天下国家に言及するスケールの大きなものも散見される。

第4章 若木の下で笠を脱げ

渡辺 慎介

このことわざ「若木の下で笠を脱げ」は、若い木の下に行ったなら笠の紐を解いて笠を脱ぎ、挨拶をしろと言っています。その意味するところは、若者に対しては若いからといって侮ることなく、敬意をもって接すべきだということなのです。これからどれ程成長し、大成するかわからない若者に対する最大の敬意の言葉です。同じような言葉で老人に対することわざに、「よき分別は老人に問え」があります。事に行き詰まり、良い考えが浮かばない時には老人の知恵を借りるのがよいという意味です。やや褒め過ぎの感があります。老人に対しては敬意と反対の意味のことわざもあります。「八十の三つ子」や、「年寄れば愚に返る」がそれです。前者は、年を取ると子供と同じように邪気のない性格になったり聞き分けがなくなったりすることの譬であり、後者は、年を取ると子供のように分別がなくなり愚か者のようになることを意味しています。「八十の三つ子」は、「年寄れば愚に返る」に比べ表向きは穏やかな表現ですが、内容は大差ないようです。

私もすでに傘寿を迎えた正真正銘の老人です。日々「年寄れば愚に返る」を実感しています。トイレに入ろうとしたら、電灯がつけっぱなしのことがあります。朝起きたら自分の部屋の電灯がつけっ放しだったこともあります。つまり、電灯の消し忘れが絶えないのです。コンピュータのバッテリーパックが劣化したので、こまめに電源を切るようにしましたが、電源を落としても電源のコンセントを抜かなかつたので、充電が継続したままになっていたこともあります。要するに「年寄れば愚に返る」、惚けているのです。

「八十の三つ子」が「八十の手習い」を始めることもあります。江戸時代の文献を読みたいとの思いから、2、3年前から私は古文書を読む勉強を始めました。大学の同級生の主宰する古文書を読む会に入会し、また折を見ては公的機関が募集する古文書講座に参加して、勉強しています。覚えるよりも忘れる方が早く、思うように読めません。講座の講師の先生は、当然ながら私よりもずっと若い方です。分からないことを質問しようとする時、「若木の下で笠を脱げ」の心掛けを忘れないようにしています。決して質問で先生を遣り込めようなどとは考えないことにしています。「この読みは、これでよろしいのでしょうか？」とか、「この解釈は、これでよろしいのでしょうか？」などと素直に質問するように心掛けています。

ある時、「郡」という字の読みに疑問を持ちました。たとえば、鎌倉郡です。普通なら、「かまくらぐん」と読みます。現代でも、その読み方です。しかし、「かまくらごおり」と読んでもよさそうです。たまたま、河竹黙阿弥の歌舞伎を読んでいる時、「かまくらごおり」式の読み方をする例を見つけました。河竹黙阿弥の台本には、すべての漢字にルビが振ってありますから、読み間違いはありません。たまたま目に付いた二つの例をコピーして、若い女性の先生に質問します。「先日、信州『伊奈郡』を『いなぐん』と読まれましたが、『いなごおり』または『いなごおり』と読むのではないのでしょうか？」と申し上げ、根拠としてコピーを提示します。すると先生は、「あら、これは黙阿弥全集ですね」と言って、読み方に興味を示しません。結局、この質問は成果なく終わりました。こんなこともあるのだらうと、諦めました。ところがしばらくして、古文書

を読む会で同じ問題に出くわします。皆さんは「ぐん」と読んで当たり前と考えておられるようでしたから、「これは『ごおり』と読むのではないですか？」と私は質問します。すると会を主宰する友人が、こんなふうに答えてくれます。「『郡』を『ごおり』と読まなければならないと主張する人は確かにいます。しかも、そう主張する人はその読み方に固執します。しかし、『ぐん』と読もうが、『ごおり』と読もうが、意味は変わらないから、『ぐん』と読んでおけばよいのではないですか。」そんな説明をしてくれました。

「郡」を「ぐん」と読んで、「ごおり」と読んで大差はないのは確かにその通りなのですが、わずか150年前の行政区画の名称の読み方が分からなくなっているとは、何とも寂しい話です。文字は、書きものに残されますが、その発音は音声情報ですから、すぐに消え失せてしまいます。もちろん、その発音が人々に記憶され受け継がれることも少なくないのですが、最終的にはルビという文字情報に変換しない限り、忘れ去られてしまいます。

それはさておき、河竹黙阿弥の歌舞伎には〇〇郡の表記は20回を超えて、出てきます。たとえば、

- ・私事は大和の國吉野^{ごおり}郡の壺内村に父の代より名主を勤め、
- ・元あなた様は相州足柄^{あしがらごおり}郡萩原村の豪家にて、

などなどです。

黙阿弥の歌舞伎の台詞に使われる漢字にはすべてルビが振られていることをすでに述べましたが、それは大正の末期に春陽堂という出版社から発刊された「黙阿弥全集」全27巻を指します。黙阿弥は全集発刊よりもずっと前の1893（明治26）年1月に他界しています。その全集の著者は、河竹黙阿弥ですが、編集を河竹繁俊が、補修を河竹絲女（いとじょ）が担当しています。絲女は黙阿弥の娘、繁俊は坪内逍遙の幹旋で絲女の養子となった演劇研究者です。黙阿弥全集の元になった資料を私は知りません。数年前まで国会図書館のデジタル・コレクションで、黙阿弥の歌舞伎「勸善懲悪^{かんぜんちようあく}のぞきのからくり^{のぞきのからくり}視機関」の台本（？）を閲覧することが可能でした。その資料は極めて読みづらいもので、たとえば台詞は、まさにミミズの這った跡のように切れ目なく文字が続いていました。漢字が含まれているかを判別することすら困難なものです。判読は、私にはとても無理な資料でした。最近になって、同じ歌舞伎をデジタル・コレクションで検索しますと、演劇台帳83-85という資料に置き換わっていました。その資料は、漢字も用いられ、以前の資料に比べれば読みやすくなっています。

さて、大正時代末に出版された黙阿弥全集ですが、そこには漢字が多用され、読みやすい全集になっています。演劇台帳やそれ以前の資料の筆書きと異なり、活字が使われています。ルビの振り方、つまり読み方については補修に携わった黙阿弥の娘・絲女の活躍があったと想像しています。絲女は、江戸時代に生き、江戸時代の風俗・習慣に精通していたインテリに違いありません。何を言いたいかと申しますと、上に述べた、たとえば「吉野郡」は、「よしのぐん」と読むのではなく、「よしのごおり」と読むのが、江戸時代の読み方ではないかと思うのです。黙阿弥全集に現れる「郡」には、すべて「ごおり」のルビが振られています。そのルビは絲女も目を通してはるはずで、つまり、江戸を生きた絲女の折り紙付きのルビであると、判断するからです。

私のこの確信を、周りに押し付けるつもりはありません。そんな押し付けをすれば、「這っても黒豆」、頑固者と言われるにきまっているからです。もしも、「『郡』を何と読みますか？」と問われることがあれば、上に述べた理由から「『ごおり』と読みます」と答えることになるでしょう。

さて、公的機関が開催する古文書講座に、話を戻しましょう。この手の講座は、比較的短期間で一つの講座が終了し、また次の新たな講座の受講生を募集するタイプが多いようです。黙阿弥全集のコピーを示しながら質問をした、若い女性の先生の新しい講座を引続き受講していました時、与えられた資料が難しいと感じることがありました。予習をして参加しようとしても、予習が捗らないのです。予習が未完のまま忸怩たる思いで講座に出席すると、その講座を運営するボランティアの運営委員が、「最近は何名の方が欠席しています。」と、愚痴をこぼすのでした。資料の難しさが欠席の原因であることを私は認識していましたが、それを口に出すことはしませんでした。たとえボランティアとは言え、運営委員なら講座の難易度を自ら判断すべきであると考えからず。

欠席者の多さにもかかわらず、若い先生は補助資料を配布して精力的に講座を進めます。講座の度に配られる補助資料は分厚く、しかも他の古文書も引用して掲載するなど本格的なものです。この補助資料を見て、先生はテキストに使っている古文書を基に論文を書いているに違いないと、私は考えました。その講座の最後の講義が終わった後に、教壇に残る先生に向かって、「先生は、今論文を書いているのですか？」と尋ねると、「そうです」との答え。「若い方は沢山の論文を書かなければならないので、あらゆる機会を捉えてどんどん論文を書いて下さい」と励ますと、「そう言うって下さるのはありがたいです」と、笑顔で答えて下さいました。

若く美しい女性の先生を豚に譬えては、大変失礼なのですが、「豚もおだてりゃ木に登る」のことわざの通り、気を良くすれば普段できないようなことも出来てしまうこともあるのです。おだてるとい言葉には、騒ぎ立てるとか、人をほめて得意にさせる、の意味がありますが、どことなく落ち着きのない言葉です。それよりも、励ますとか単に褒めるとい言葉が適切かと思われまます。誰でも励まされたり、褒められたりすれば、気を良くしますから、やる気はより一層強まり、良い方向に進むことが期待できます。その結果として、若い研究者の論文数が増えて研究職への就職に繋がれば、それにこしたことはありません。私のような年寄りに出来ることは、将来大成するかもしれない若者に敬意を払うことと、必要に応じて若者を励まし、またその努力を褒めることなのでしょう。

ところで、先ほど「黙阿弥全集」のルビの振り方は、補修として出版に関わった黙阿弥の娘・河竹絲女が目を通してあるから、江戸時代の読み方に間違いないと、断言しました。それを確かめる資料がないだろうか少し探してみました。調べる内に、二つの資料が目にとまります。一つは河竹繁俊自身の書いた「私の履歴書」です。それは日本経済新聞に連載された文章で、1960年に書かれたものです。もう一つは、河竹繁俊の次男・河竹登志夫（本名・俊雄）の書いた「作者の家 黙阿弥以後の人びと」です。この「作者の家」は昭和 55（1980）年に講談社から出版され、昭和 59（1984）年に講談社から二冊の本として文庫本化され、さらに平成 13（2001）年に岩波書店から、岩波現代文庫二冊として出版されています。いずれも今は品切れの状態、手に入りません。たまたま、地元の図書館に昭和 55 年度版があるのを見つけて早速読んでみました。この本は資料を基にした書籍として高い評価を得ています。ですから書かれた内容は、信頼性が高いと考えてよいのでしょう。ただし、表向きは年代順に書かれているのですが、随所にエピソードが挿入されているため、年代を追って読もうとしても途中で年代順が分からなくなることもあります。

それはそれとして、「作者の家」から「黙阿弥全集」に関する箇所を拾ってみます。まず、全集

出版の契機として次の文章があります。

前の脚本集を手がけた春陽堂の小峰八郎氏が、宇田川の陋屋を訪ねてきたのは、ここへ引越して四ヵ月ほど経った十三年二月二十日だった。

とあります。この文章には、説明が必要です。まず、前の脚本集とあるのは、大正八年十二月に出版が始まり大正十二年一月に完結している「黙阿弥脚本集」全25巻を指します。河竹黙阿弥の歌舞伎の脚本を集めた「黙阿弥脚本集」ですが、残念ながら今は、引用されることが多くないように見受けられます。もっぱら、「黙阿弥全集」が引用されているようです。それはともかく、上の引用にある春陽堂小峰八郎氏の訪問から、「黙阿弥全集」の企画は始まったということのようです。次に、春陽堂の小峰氏が「宇田川の陋屋を訪ねた」とあります。陋屋とは、むさくるしい家、狭い家を指します。どうして河竹絲女と繁俊が狭い家に住んでいたかということ、それは前年の大正十二年九月一日に起きた関東大震災によって、これ迄住んでいた本所の600坪の土地に立つ家が焼けてしまったからなのです。関東大震災の後で、住む家にも困る状況でしたが、全集を出版するにあたり、大震災による資料の焼失が大きな妨げになっていました。しかし、

（震災によって、黙阿弥）自筆の稿本類は焼失したが、震災の前年に「黙阿弥脚本集」は完結していたので、名作はまず原典のまま後世に伝えることができたのは、不幸中の幸いだった。これは嗣子としての繁俊が、手柄とするに足ることであった。

とあるように、「黙阿弥脚本集」の出版が、関東大震災前に終わっていたのが幸いしていたのです。

しかし、災後まもなく「全集」の企画が生まれた。そうすると脚本集に収録されなかった作品も必要になる。そこで繁俊は、大阪に長くいたことのある竹柴金三という古参の門弟に口ききを頼み、もと道頓堀の弁天屋の座主だった尼野貴英という人から、愛蔵の台本三千冊を買入れた。

この話をまとめるため繁俊は、大阪に一週間滞在したが、本は茶箱に十杯あったという。その大部分は、かつて東京の歌舞伎座にいた並木五郎の収集になるもので、古浄瑠璃本や四世鶴屋南北や黙阿弥の自筆の台本のような、貴重な資料も含まれていた。

ほかに、先に亡くなった其水（注。黙阿弥の門弟）の所蔵台本も、未亡人おそめさんの希望もあって、譲り受けることができた。こうした台本によって「黙阿弥全集」は成るのだが、これらは戦前、各劇場に貸与されて実用にも役立った。

こうした資料の収集もあり、「黙阿弥全集」の編集作業はピッチを上げることになります。実際、「黙阿弥全集」第1巻は、大正13（1924）年7月に刊行され、ほぼ月に一巻ずつのペースで出版を重ね、昭和元（1926）年12月には最終巻の第27巻の刊行を終えます。

それでは補修に名を連ねた河竹絲女の役割は何だったのでしょうか。「作家の家」には、それに関する記述は一切ありません。絲女は、その間、闘病生活を送っていたのです。実は、絲女は乳癌だったのです。事の起こりは、

絲女が左の乳房の下に「五銭白銅」ほどの大きさの堅いしこりがあることに気づいたのは、大正十年の七月であった。

でした。医者は手術を勧めますが、注射も手術も嫌いな絲女は、手術を頑なに拒みます。関東大震災という未曾有の災害による苦労もあり、乳癌は悪化します。そして、

大正十三年十一月二十四日午後三時五十三分——東京府中渋谷宇田川八十五番地におい

て、一代の女丈夫河竹絲女は、かくしてかぞえ年七十五歳の生涯を閉じた。とあります。大正13年10月に「黙阿弥全集」第3巻が出版されています。11月の発刊はなく、12月に第4巻と第5巻が刊行されています。絲女の病気の悪化に伴う多忙やその後の葬儀などにより、大正13年11月の発刊が滞ったのかもしれませんが、いずれにしても、「黙阿弥全集」刊行の話が持ち上がった大正13年2月20日から、第1巻が刊行された大正13年7月までの間に、絲女が「黙阿弥全集」に関わった記録は残されていません。

そうしますと、江戸に生きた絲女に知識や経験が「黙阿弥全集」に生かされていないことになり、したがって、少し前に「江戸を生きた絲女の折り紙付きのルビである」と書きました内容は偽りになってしまいます。しかし、河竹登志夫の記録が、それを補ってくれます。こんな記述があります。

なお、吉田幸三郎氏の話によると、結婚後そう間もないころ、たぶん、絲女が根岸へ行っただからと思うが、吉田氏ほか数名が招かれて、本読みの会が催されたそう。そのときは母も挨拶に出て、尾頭つきの料理が出たという。このときの本読みは、父はせず、其水が「義経千本桜」の鳥居前、清吉が「髪結新三」、晋吉が「仲光」だったと、吉田氏ははっきり記憶している。

絲女を中心に本読みの会が催されていたのです。そこで読まれていたのは、黙阿弥の作品にほかなりません。上の文章に現れる母と父は、著者・河竹登志夫の母「みつ」と父「繁俊」です。二人の結婚のことは少し後に述べることにします。「この時の本読みは、父はせず」とありますから、通常は、繁俊は本読みを担当していたことを窺わせます。つまり、河竹繁俊は、本読みを通して絲女の指導を受けていたこととなります。江戸時代の読みをそこで習得したに違いありません。また、こんな記述もあります。

作家宗家として絲女の生きがいでもあり、義務でもあった仕事の一つに、脚本の研究会があった。大正六年十一月二十二日の日記（注。絲女の日記）に、

今日は父の命日脚本会を開く業の都合に依り不参の者あり当日参りし者○其水○為三○秀葉○晋吉○蝶三○三津三○秀吉○繁俊○各々自作のものを読む中々面白き事あり大阪金三の分は替りにて読む○竹三不参の為替りにて読む

とあり、つぎに「末に我ら新作弘法大師の狂言二夕幕を繁俊読み目出度お仕舞○泉下の父も悦びの事と思う」と記されている。絲女も一門のはげみのためにと、率先して創作をこころみていたのである。（中略）

こうした門弟たちの新作本読みの集いは、何度か行われている。大正八年七月十三日には「作者睦会」という組織もでき、

上野梅川亭にて初会を開く門弟四十人程來る地方行不参我ら会長故寄付百円遣すとある。ただし絲女自身は「病気に付き不参」であった。

黙阿弥の作品の本読みだけではなく、門弟の持ち寄った新作の脚本の研究会も行われていたのです。その折には、繁俊も必ず参加をしています。

「黙阿弥全集」（大正13年）や「黙阿弥脚本集」（大正8年）よりも前に、繁俊は「河竹黙阿弥」と題する伝記を書いています。それは、黙阿弥23回忌のために書かれた伝記であり、大正3年1月に執筆を開始し、その年の5月に500枚の原稿を書き上げています。その原稿は、絲女と其水

の校閲を経て、8月中に清書を済ませていました。演芸珍書刊行会から大正3（1914）年12月26日に発刊され、大正4年1月22日の黙阿弥23回忌に間に合いました。その間の事情を繁俊は「私の履歴書」の中で、次のように書いています。

と、そこへ黙阿弥の二十三回忌を大正五年（注。正しくは大正四年）の一月二十二日に迎えることになったので、私はこの機会に黙阿弥伝をこしらえあげたいと決心した。ちょうど母や其水からの聞書も十数冊になり脚本解題もだいたい卒業に近かった。この計画にたいしては逍遙も「それは結構だ、ぜひやりたまえ」と激励した。

つまり、黙阿弥の作品・脚本に関する研究もすでにほぼ終えて、母の絲女や門弟の其水からの聞き取りが十分になったと判断した時点で、繁俊は伝記「河竹黙阿弥」に取り掛かったことになります。この時点で、繁俊は黙阿弥の歌舞伎に対する理解は、すでに十分に高まっていたと考えられます。ルビの振り方も、当然習得していたはずです。

なお、「黙阿弥脚本集」には絲女の名前はどこにも出てきません。しかし、「黙阿弥全集」には、補修として河竹絲女の名前があります。この辺の事情は、登志夫の「作者の家」にも、繁俊の「私の履歴書」にも、記述はありません。あるいは、繁俊が、死に瀕した絲女を励ますために、補修という形で絲女の名前を書き加えたのかもしれませんが、それは、闇の中のことなので、今はもう判断できません。

最後に、河竹繁俊とみつの結婚について触れます。河竹繁俊と田中みつの結婚は、大正6（1917）年4月23日でした。婚礼は柳橋「深川亭」で行われています。絲女は68歳、繁俊29歳、みつ21歳の時でした。「作者の家」に、こんな記述があります。

みつが嫁に来てから三カ月余。七月七日に絲女は、中根岸の其水の家のすぐそばの借家に転居した。表向きは「方違え」のためというのであった。

方違えということは現在でも、干支（えと）や方位を気にする人、たとえば親戚付き合いの花柳寿輔の家などでは、よくやっている。しかし、絲女の真意は、嫁を迎える直前からつの一方の、漠然とした嫉妬の念からくる憂悶をいやそうとする、苦肉の策であったのかもしれない。

見かねた其水が繁俊とひそかに談合したうえ、すぐ筋向いにちょうど家が空いたので、「手前の近所にいい家がありますから、方違えをなすっては」と持ちかけたのである。

絲女は自尊心がつよく、強情我慢の人だったから、万事こうした持ちかけ方をしなければだめだった。いつの世どこの国にも、若さへの嫉妬は、嫁姑ないし異世代のあいだの争いは絶えないが、動機はともあれその当時において、それを未然に防ぐべく当初から別居・転地を実行した絲女は、やはり並々ならぬ人物であったと言えるのではなからうか。

理由は分かりませんが、絲女は、若者特に若い女性に対する嫉妬が異常に強かったそうです。このままでは、繁俊・みつの新婚生活に支障を来すと判断した絲女は、親の代から住み慣れた本所を離れ、根岸に移転することを決めたのです。

「若木の下では笠を脱げ」は若者に敬意を持つべきことを教えています。それとは別に、絲女のように、自分の欠点を知り、異世代間の摩擦を避けるため自ら身を引くこと、それもまた老人の嗜みなのかもしれません。こうした智慧のある老人になりたいものです。

第2部 ことわざコラム

第1章 ゆるされる‘嘘’とは？—嘘も方便

小森 英明

今回扱う〈嘘も方便〉は、〈元のもくあみ〉等と同じく、平仮名になおすと7文字、すなわち7音節からなる諺です。この諺は、我々日本人にとって極めて耳触りがよく、広く人口に膾炙されています。元来、日本語では五七調とか七五調とか言うように、5音節や7音節から成る言葉遣いが、今でも重視されているようです。

この諺は、時田昌瑞氏が著した『岩波ことわざ辞典』（岩波書店 2014）によれば、一般的な意味として「嘘は、使う目的がよこしまでなければ、必要なこともあるということ」（同書 90 頁）であって、さらには「相手が真実に耐えられなかったり、平静に聞くことができない状況では、嘘がかえって状況を好転させる場合がある」と記されています。それに加えて「もちろん「方便」の嘘も、乱用すれば本物の嘘となるのだが…」とも併せて指摘されています。

私の母は、80代後半の高齢者で、認知症（アルツハイマー中期）を患っていますが、その母を歯医者に連れ出す場合に「市の検診があるから受けてほしい」旨の嘘をつきます。そうしないと、本人は頑として歯科を自ら受診しようとしなからず。

実際に、いかに歯痛で自分が苦しんでも、その歯痛が例えば翌日に限って起こらない場合には、認知症を患う母はきれいにその事実を忘れてしまいます。言い換えると、歯痛という事実が記憶として脳内に蓄積されていきません。そうしますと、本人自身、歯科を受診する必要性を全く感じなくなってしまうのです。こうして、介護する側にとっては、実に困った事態が出来してしまうこととなります。

そうした中で、私はこの諺をやおら自分に言い聞かせては、上で見た巧みな‘嘘’（？）をつくることで、母を歯医者に連れ出している次第です。

その際には、「どんなときも、うそをつくることになったら、それは、本当にその人のためなのか、考えることが大事」（鈴木みずえ『認知症の人の気持ちがよくわかる聞き方・話し方』〔池田書店 2022〕144 頁）といった観点こそが極めて重要のように思われます。なぜなら、その場限りの‘嘘’をつくと、一回や二回は相手を動かしても、毎回、相手を動かせる訳にはいなくなるからです。それに、‘嘘’をつく場合、こちら側に良心の呵責が発生し、パフォーマンス力が低下することも大いに問題となります。

さて次に、この諺の淵源の一つとして、仏典の『大般涅槃経』を挙げてみたいと思います。

本経は4世紀ごろ成立を見た中期大乘経典に属し、曇無讖（どんむせん；385～433）訳の40巻本（北涅槃、北本）、および慧嚴（えげん；生没年不明）等訳（420～479 訳出）の36巻本（南涅槃、南本）がそれぞれ存在します。加えて、本経の説く内容は、実際に東アジアの仏教受容にも大きな影響を及ぼしました。ここでは前者より、引用してみます。

「カッサパ菩薩、私には嘘の言葉がない。とはいっても、私が嘘をつくことで人々が利益を得ることがあるのなら、適宜方便を使って説法することになる（善男子！如来雖無虚妄之言、若知衆生因虚妄説得法利者、随宜方便則為説之）」（大般涅槃経卷第十七）。

このように、ブッダをして言わしめています。そこでは、「虚妄」は‘嘘’に意識されているものの（田上太秀訳）、その‘嘘’は「人々が利益を得ることがある」場合に限り、是認されていま

す。結局は、＜嘘も方便＞と同じことを謳っていることになります。

それでは、今度は＜嘘も方便＞を逆にして、「方便も嘘」は成り立つものでしょうか？この場合、‘方便’には‘真実’も含まれている場合も考えられるので、論理的には破綻することになります。したがって、「方便も嘘」は成り立ちません。

このように、衆生を動かして‘涅槃（≒さとり）’へと導くことが、本来の‘方便’の使命ですが、一番ふさわしいのは、その‘方便’の内容自体が‘嘘’となるのではなく、実際の‘真実’であることです。しかし、そのことが適わないのならば、（致し方なく）‘方便’には‘嘘’が含まれてしまうことも認めないわけにはいきません。上で見たブッダの言説は、そのあたりの経緯を裏付けていることにもなります。

加えて、＜嘘も方便＞は不思議と元氣や勇気を私に与えてくれ、その結果、自己受容や自己肯定感を促して、清濁併せ呑むといった気概を養ってくれます（これは本当です）。特に、母を介護する場合にそう感じます。現に認知症を患った人を介護する際には、その人を説得するよりも、むしろ、その人の納得感に訴えることが推奨されているからです。

なお、こうした‘嘘’を是認する立場は、功利主義か義務論かと問われれば、明らかに前者、すなわち功利主義の陣営に属していると言えます。功利主義とは、「行為や制度の社会的な望ましさは、その結果として生じる効用（功利、有用性、英：utility）によって決定される」とする考え方に集約され、しかも「帰結主義」に根差している点がこの思想の特徴であるとのこと（「」内は、2020年時点でのWikipediaからの引用）。

これに比して、一方のカントに由来する義務論では、‘嘘’をつくことに対して、一般的には不寛容です。

そして、こうした功利主義と義務論が鮮明な対立を見せるのが医療現場です。中でも、‘インフォームドコンセント（説明と同意：略称IC）’はその最たるものでしょう。患者を前にして‘嘘’をつくべきか、つかない方が良いかで医師は迷います。もしも病名を告知した結果、「相手が真実に耐えられなかったり、平静に聞くことができない状況」が出来れば、それは、日頃から相手（患者）を見て（診て）いなかったことになります。

病院全体の方針によっては、予め病名告知をICに含めるところもあります。その場合にも、医師は決して患者を見放すわけではないということを強調しているようです。

また、病名告知を行わなくても、日頃の自分が受ける検査や医師・看護師の振る舞い等から推して、何となく、病名が判る場合もあります。しかしながら、患者の「知らないでおく自由」は最後（最期）まで保証されるべきだと私は考えます。

ともあれ、ここで‘嘘’をつくべきか、つかない方が良いか、どちらを取るにせよ、ICとは難しい局面であることに変わりなく、そんなに簡単に行かないことだけは確かです。

ところで、千手観音の仏像に代表される手の多さは、‘方便’の多さを象徴しています。その‘方便’の多さを駆使しては、菩薩は衆生に対して手を広く差し伸べて、彼らを‘涅槃（≒さとり）’へと誘うのです。その‘方便’には、今日的な意味で言う‘嘘’も当然含まれる、これが＜嘘も方便＞ということなのでしょう。

ただし、我々凡夫がこの‘嘘’を乱用すると、それはただの‘嘘’、「本物の嘘」に成り下がってしまうといったことも、同時に警戒しなければなりません。

何れにせよ、‘嘘’は、総じて善を志向している場合にのみ、是認されるようです。

第2章 中国の歴史小説とことわざ

三木 恒治

私は学生時代、平易な文体ということもあってか、陳舜臣氏の『小説十八史略』を読んで英雄たちの織り成すダイナミックな世界に瞬く間に引き込まれ、それが中国の古代、中世史に興味を抱く契機となった、以来今日に至るまで、夏休みなど長期の休暇期間には中国の長編歴史小説を読むことにしている。総じて日本のものと比べ人の運命の浮き沈みが激しく、展開にスピード感がある。また権謀術数が至る所に張り巡らされており、頂点を極め皇帝に上り詰めた一族が、易姓革命によって一転して皆殺しの憂き目にあうといった逆転劇のパターンが数多くみられる。まさにドロドロとした権力欲と人間模様が凝縮され、「高みに上るほど落下の効果が増す」という悲劇の法則そのままのドラマが映し込まれ、興味が尽きない。その後「日本ことわざ文化学会」に入会してからは、「ことわざ」の視点から読む面白さも加わった。中国の歴史はことわざや故事成句の宝庫と言っても過言ではなく、その成り立ちの経緯がそのまま物語となっているものも多い。最近読んだものでは、宮城谷昌光氏の『湖底の城』が印象に残った。この作品は春秋時代末期の楚や呉越の争いを題材としており、序盤と中盤は伍子胥、終盤は范蠡が主人公に設定されている。この二人に加え、軍師の孫武も要所で登場し、美女の誉れ高い西施も物語に彩を添え、戦乱に翻弄される人物像が虚実を交えながら巧みに掘り下げられた秀作となっている。多少難解な漢語（氏のこだわりであろう）が頻出し、頁をめくるペースがダウンする箇所も結構あるが、巧みな描写の技法（特に水のモチーフは秀逸）や物語の伏線の妙（「黄金の盾」の挿話など）も手伝って、9巻にわたる大著を退屈せずに読み終えることができた。

呉越両国の長年の争いのエピソードには、誰もが耳にしたことのある故事成句・ことわざの類が数多く出てくる。例えば、「呉越同舟」（『孫子』）「臥薪嘗胆」（『十八史略』）「死者に鞭打つ」（『史記』）「顰に倣う」（『荘子』）などだ。これらのことわざは史実の輪郭を明確にし、筋を推し進める効果を発揮している。ただ、『湖底の城』では単純にことわざの世界が反映されているわけではない。確かに中国古典に記載されている史実が骨組みとなっている印象は受けるが、細部は宮城谷氏独自の視点で描かれている。作者は殊更ことわざを意識しているわけではなく、宿敵同士である呉王夫差、越王句踐それぞれの苦節の歳月を表す四字熟語として知られている「臥薪嘗胆」などはフィクションだとして重要視はしていない。しかしながら、読者の側からは、随所で紹介されていることわざが物語の求心力になっていることは見過ごせない。物語の大半は戦の駆け引きを中心に繰り広げられているが、生死を賭けた戦いの場において人間の根っこの部分が最も顕著な形で表出し、それがことわざを生み出しやすい背景を形成しているということなのだろう。特に伍子胥が親兄弟の仇である楚の平王の墓を暴く場面は、復讐がテーマとあってよい前半の山場となっており、勧善懲悪という観点から一種の爽快感を与えてくれる。（かといって、けっして陰惨な描き方ではない。これは作者の品の良さがなせる業だろう）「死者に鞭打つ」はまさに物語の前半がそこへ向かって雪崩れ込んでゆく収束点となっているのである。

終盤では舞台は呉越の争いに転じ、范蠡が句踐の参謀役として活躍するが、句踐を春秋五覇の一人に導いた後は地位に執着することなく、きっぱりと身を引いて自由人の道を選ぶ。主人公の両雄はともに、仕える主君と袂を分かつという最終局面を迎えることになるが、二人がたどる末

路は好対照である。伍子胥が悲願を達成した後もその地位にとどまり直球勝負で玉砕したのに対し、范蠡は権力とは一線を画し緩急を織り交ぜて難局を首尾よく切り抜ける。まるで伍子胥の失敗を教訓としているように、未練を残すことなく檣舞台から退くのである。范蠡の生きざまは功成り名遂げた者の取るべき身の処し方を示唆しているように思われる。「狡兎死して走狗煮らる」「月満つれば即ち欠く」(いずれも『史記』)、つまり「人は変わり、世は常ならず」という道理を悟っているからこそその決断であり、潔い引き際と言える。おそらく句踐に代表される為政者の非情な部分を見通していたということであろうか。范蠡はそうした先読みができる伶俐な人物ではあるが、けっして冷血漢としては描かれていない所も物語の魅力となっている。呉への報復の根回しとして夫差に献上されたと伝えられている西施(句踐の愛妾)の最期についても、物語では脚色されている。史伝ではこの逸話は夫差を骨抜きにするための范蠡の策略とされているが、物語では彼は西施の境涯に同情し、窮余の一策で句踐の魔の手から彼女を救い出す。范蠡は知略に優れているとともに情宜にも厚い、人間味あふれる人物として描かれている。この作品で作者の思い入れが一番強い登場人物は、范蠡なのかもしれない。

二人の主人公と並んでキャラが立っているのは、呉の軍師である孫武(孫子)だ。彼は、軍律を徹底させ呉王闔閭を春秋時代の覇者に仕立てた存在として異彩を放っている。また物語の中盤では、持ち前の戦術で伍子胥が宿願の復讐を果たすのに一役買っている。彼にまつわる「拙速」という言葉は普通ネガティブな意味で使われているが、この物語の解釈ではそうになっていない。ぐずぐずしているより、拙くても迅速に動いた方が成功につながる近道というのが本来の意味だとされている。これは私にとって「目からうろこ」の蘊蓄話であった。彼に因んだ「疾きこと風のごとし」は「風林火山」の旗印でなじみの兵法の基本的な戦術であるが、信玄だけでなくナポレオンやゲーデリアンなど、相手の陣容が整わないうちに素早い攻撃を仕掛ける「先手必勝」の電撃戦が本領の名将たちを思い出させてくれる。ただ、孫武が理想としたのはあくまで「戦わずして勝つこと」であり、情報戦によって先手を制することにあつたようだ。「機先を制す」戦術も、そのための極意であつたのだろう。

最後に、伍子胥に纏わることわざでよく知られている「日暮れて途遠し」(『史記』)について触れ、締めくくりとしたい。これは、平王の墓を暴いた彼の残忍さを非難するかつての僚友の申包胥に返した弁解の言葉として有名だ。伍子胥は、「人生はきれいごとや道理では割り切れない」ことを言いたかったのであろうが、復讐に人生の長い年月と精力を使い果たしたために、他にやり残したことが多くありすぎるという悔恨が滲み出た述懐だったとも思われる。この言葉は、定年退職を間近に控えた我が身には切実に迫ってくるものがある。人間というものは、時間を区切られると、それまで気づかなかつたこと、できなかったことに必要以上に過敏になるということかもしれない。もちろん、それはそれで前向きな姿勢で新たな人生の局面に向かっていく励みともなるはずだ。しかし、それまでやってきたことに一定の達成感、充実感を味わえるような境地に到達することも、人生の白秋期には必要なのではないだろうか。今の自分は悲しい哉、まだまだ余計な邪念や煩悩を断ち切るには至らず、かといって新たな展望も持ち合わせていないというのが実情である。いずれにしても、残された時間の中でどれだけのことができるのかをしっかりと見極め、悔いの残らないよう第二の人生に踏み出さなければならないだろう。

第3章 膏盲に入る病—ことわざ病—

山口 政信

久々に会った仲間の話題に〈病〉があります。壮健であった頃は、楽しいはずの会なのに病気のことを自慢らしく話す空気を好ましく思っていませんでした。しかし身体に大きな変調をきたした75歳を境にして、病気の話にも元氣よく参入している自分に気づくようになりました。その一方で「そりゃお前、病気やで。それも慢性病やなァ」といった笑話には、子どもの頃から率先して輪を形づくってきました。

よきにつけ悪しきにつけ病の話で盛り上がるのは、共通する身心が存在するからです。「思う事言わねば腹ふくる」ですから、話を聞いてもらえば悩みや痛みは軽減し、仲間がいることを知るだけでもほぐれます。「そうそう／あるある」には共感エネルギーが満ちており、その語り口に誇張と多少の自虐性が加味されれば辛い話も笑い話に転じます。

ではこれらの話に「気軽ければ病なし」と笑顔で応じた人がいたとしたらどうでしょう。口調のよいことわざが加味されると空気が引き締まり、同意の機運が高まります。ことわざには空気を醸成し集約する威力があり、それが当を得たものであれば、話者が然るべき人物であるという認識が広がるのです。これが「膏盲に入る病」の予兆なのかもしれません。

ところでビョウ・ヘイと音読される病はやむ／やまいと訓読され、わずらう／わずらいという意味を有します。表題の病に相応しいのは「病的なくせ、容易に直らないわるいくせ」（広辞苑）であり、病癖という熟語が似合いそうです。また「わるいくせ。よくない習慣」を意味する悪癖もこの類ですが、いずれにしても「鬼の霍乱」で混ぜ返され「病膏盲に入る」が加わるに至って最高潮に達し、なおる見込みがない病ということで全員が納得して、「元の鞘に納まる」という経過をたどることになります。

辞典を読んでいて心に留まったもう一つのこと、「治らない」ではなく「直らない」と解説されていたことがあります。そこには「治す」は「直す」を見よとの指示があり、「なおす【直す】」の解説文には「(ふつう『治す』とも書く) 病気や怪我を治療する」と記されていました。「直す」には「正す」と言う意味もありますが、軽口で用いる膏盲病はなおるはずはなく、直す／正す必要もないということになりそうです。

余談ながら、なおすという言葉は片づけるという意味でも用いられており、これに関わるエピソードが母校の陸上競技部で語り継がれていました。それは「ハードルをなおしておけ」と言われた新入生が、「壊れているのはどこですか」と問いなおしたというものです。

続いて思い浮かんだのが草津節の文句です。その七番には「お医者様でも草津の湯でも アドッコイショ 惚れた病は コーリャ 治りやせぬヨ チョイナ チョイナ」とあります。女性たちが唄いながら湯もみをする姿が印象的な民謡ですが、八番の「惚れた病も治せば治る … 好いたお方と添りや治るヨ …」を知り、一本取られたという衝撃が走りました。

なお「草津よいとこ 一度はおいで…」と一番に見えることから、一度だけ行ったことがあります。しかし〈ことわざ病〉がなおる気配はなく、やはり湯治が必要なのもかもしれない、と笑ったりもしました。

そう、ことわざには媚薬／惚れ薬にも似た薬効があります。膏盲に入ったことわざ病の湯当りは望むところであり、湯冷めの心配もこの学会に入っている限り無用です。

第4章 野球ことばと新聞記事

横田 詞輝

「二刀流」は刀や剣などの武器を両手に一本ずつ持って戦う戦術のことである。しかし、今や「二刀流」といえばメジャーリーガー大谷翔平選手の代名詞であり、新聞の見出しにも「二刀流・大谷」と使われている。注釈なしに意味が通じるほど一般に認知されたといってよい。誰が言い始めたのかわからないが、自然に皆が使い納得する「野球ことば」は「ことわざ」と似ている。草野球のヤジ、あるいは実況中継や野球漫画などで自然に覚えた表現がある。これらのことばはどこまで市民権を得ているのだろうか。

たとえば「ドカベン」は野球ことばとして定着しているが、元々は「どか弁」つまり日雇労働者の俗称の弁当箱のことである。漫画家・水島新司氏の作品のタイトル「ドカベン」は主人公の山田太郎が「ドカッと大きな弁当」を食べるあだ名に由来しており、野球ではなく柔道漫画としてスタートしている。何かをきっかけとしたことばが、いつの間にか広まってイメージを伝えるところも「ことわざ」と似ている。

メディアの中でも用字用語に慎重な新聞はどのように扱っているだろう。毎日新聞のデータベースで記事や見出しに使われた「野球ことば」を数えてみた。たとえば「二刀流」は野球以外でも使われている言葉だが、大谷翔平選手の登場以降、メディアで使われる頻度は増えた。検索結果の最も古いものを(古)新しいものを(新)として掲載された記事の該当箇所を引用した。なお、毎日新聞記事1980年～2023年7月までの検索結果による。

検索ワード

【野球/二刀流】→検索結果数916件(古)野球とフットボールの二刀流(掲載日1992年09月18日)
(新)3年連続の「二刀流」での選出(掲載日2023年07月05日)

【伝統の一戦】→検索結果数424件(古)伝統の一戦にファンの目が集まった(1992年07月01日)
(新)「伝統の一戦」の主演となり(2023年04月12日)

【野球の神様】→検索結果数282件(古)「野球の神様」からサイン入りバットを贈られた(1994年05月28日)
(新)「野球の神様」と同様に(2023年04月20日)

【ドカベン】→検索結果数269件(古)ドカベンの漫画と一緒に(1988年01月15日)(新)甲子園で戦う「ドカベン」(2023年12月31日)

【一球入魂】→検索結果数148件(古)一球入魂の精神で(1988年03月28日)(新)聖地で一球入魂を(2023年03月02日)

【甲子園には魔物が棲む】→検索ワード【甲子園/魔物】→検索結果数96件(古)魔物すむ甲子園(1983年08月09日)(新)魔物となるか、励みとなるか(2023年03月27日)

【優勝旗/白河の関】→検索結果数69件(古)優勝旗が“白河の関”を越える(1989年08月23日)(新)優勝旗の「白河の関越え」を(2023年03月18日)

【代打の神様】→検索結果数 66 件 (古)「代打の神様」と呼ばれた (2000 年 06 月 16 日) (新)「代打の神様」とも呼ばれる (2022 年 10 月 31 日)

【死のロード】→検索結果数 53 件 (古)“死のロード” 阪神、正念場 (1992 年 08 月 04 日) (新)「死のロード」前に (2006 年 07 月 29 日)

【ラッキー 7】→検索結果数 42 件 (古)「ラッキー 7」決めた (1992 年 07 月 30 日) (新) ラッキー 7 に集中打 (2014 年 07 月 23 日)

【スミ 1】→検索結果数 38 件 (古) つながりがなく「スミ 1」 (1994 年 04 月 02 日) (新)「スミ 1」で勝たせる好投 (2022 年 05 月 15 日)

【魔曲】→検索結果数 7 件 (古)「魔曲」がドームをのみ込んだ (2022 年 07 月 28 日) (新) 智弁和歌山の応援曲で『魔曲』として有名 (2023 年 03 月 27 日)

【野球/二刀流】の検索結果数は 916 件で、かなり多い。【二刀流】だけで検索すればさらに増える。大谷選手の NPB 初出場は 2013 年なので、まだ 10 年しかたっていない。20 年前には、それほど使われることのなかったことば「二刀流」。注目されることで更に使われる頻度も増えてくる。ことばにはそんな面白さがある。

【野球の神様】といえばベーブ・ルース。「打撃の神様」は元巨人の川上哲治氏。ほかにも「神様、仏様、稲尾様」や「村神様」など神仏にちなんだことばは少なくない。この発想は、勝負事は神頼みが多いからか。それとも神がかっている活躍からくるのだろうか。

【甲子園には魔物が棲む】→【甲子園/魔物】での検索結果は 87 件だが、うち東京版での結果数は 39 件。大阪版 (関西) のほうが野球熱が高いのか、見出しも感情的なものが多い。(※以前は運動面は東京、大阪それぞれで編集していた)

【死のロード】は夏の高校野球開催期間中に阪神タイガース限定で使われる言葉だが 2006 年を最後に紙面には登場していない。阪神がロード期間中に強くなったので？使われなくなったのかは定かではない。

【ラッキー 7】は 7 回の攻撃で得点が入りやすいと言われ、投手分業制が確立されていない時代は先発投手の疲れが見え始めるためと言われていた。野球以外では 1984 年に発売された宝くじの名称やパチンコ店名などでも使われている。

【スミ 1】は初回に 1 点を入れてそのまま試合終了したスコア。スミ 1 で勝てば解説者は雄弁になるが、スミ 1 で負ければ「出だしはよかった」くらいしか言うことはない。NHK-BS の野球情報バラエティ番組「球辞苑」なら、このテーマを掘り下げて分析してくれるかもしれない。

【魔曲】は 2022 年に初出。試合中に曲が奏でられるのはかなり限定されるうえに、それにちなんで記事や見出しとなることはさらに少ないと思うが、7 件の検索数は使用頻度の多い「流行語」と言えるかもしれない。

【執筆者紹介（五十音順）】

①氏名（担当章）

②出生年 ③出身地 ④所属

①蟻川 剛（第1部/第1章）

②1950年 ③東京都出身

④日本ことわざ文化学会理事

①小森 英明（第2部/第1章）

②1962年 ③三重県出身

④武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員

日本笑い学会三重支部運営委員

①清水 泰生（第1部/第2章）

②1965年 ③和歌山県出身

④同志社大学嘱託講師

日本ことわざ文化学会理事

①時田 昌瑞（表紙説明、第1部/第3章）

②1945年 ③千葉県出身

④ことわざ・いろはカルタ研究家

日本ことわざ文化学会副会長

①三木 恒治（第2部/第2章）

②1956年 ③岡山県出身

④岡山理科大学教授

日本ことわざ文化学会理事

①山口 政信（第2部/第3章）

②1946年 ③徳島県出身

④明治大学名誉教授

日本ことわざ文化学会事務局長

①横田 詞輝（第2部/第4章）

②1969年 ③兵庫県出身

④毎日新聞客員編集委員

①渡辺 慎介（第1部/第4章）

②1943年 ③神奈川県出身

④横浜国立大学名誉教授

日本ことわざ文化学会会長

日本ことわざ文化学会



ホームページ <https://www.kotowaza-bunka.org/>

『コトワザあらかると』

2023年11月1日 第7号第1刷発行

発行者：日本ことわざ文化学会 ©

「日本ことわざ文化学会」事務局

所在地：〒700-0005 岡山市北区理大町1-1

岡山理科大学教育学部 藤城研究室

学会 HP : <https://www.kotowaza-bunka.org/>

E-mail : paremio@gmail.com